

暮田2025年1月総評

来世ってこんな日々だね

白飛びする四万十にあなた探す

はっとなつ

永田玲

映像が白飛びしているということは画質はあまり良くないはずで、鑑賞しているのはビデオテープだろうか。画面に隔てられながら光の粒の一つ一つに「あなた」を見つけようとする眼差しが胸を打つ。「来世」という言葉を突飛に感じないのは、四万十川が三途の川へと連想を導くからだろう。

春の昼ただ手であるを手をゆるす

鷺浦 るか

目を覚まして起き上がったからの数時間、食事をするにも、掃除をするにも、本を読むにも、手はひっきりなしに動いている。手は人間にとってはじめての道具なのだ。ぼーっとしているのか、眠っているのか、何もしていない時間を豊かに描いた。

「空白の期間は月の裏側で

薔薇を育ててました」

(薔薇の、ために、ね)

詩央えみる

履歴書の職歴欄に就業していない期間があることを「空白の期間」と呼んで忌避する風潮がある。すべての時間を経済的な価値に還元しようとする圧力に対抗するため「裏側」に潜み、「薔薇」に尽くす(「星の王子さま」も想起させる)。わたしはこの歌の肩を持ちたい。

ブロッコリーのつぼみ

をまとう

きみといて

三月だって怖くはないさ

川上 真央

ブロッコリーの房についている緑のつぶつぶ、あれがつぼみらしい。上の句はさまざまな受け取り方ができるが、もっとも現実味があるのは「ブロッコリーのつぼみに似た緑色、あるいはドット柄の服」だろうか。反対に、もっとも非現実的なのは「つぶつぶそのものを服のように纏っている」という景か。しかし、そのあり得なさが下句の安心感につながっているような気もする。

「天国で強盗したから魂に
カラーボールの
ペンキついてて、」
辻 あい

天国は天国でも、死後に行くところではなく、生まれる前にいるところとしての天国をイメージした。強盗をして捕まり、ペンキのついた魂で生まれてきたのだ。鮮やかな色のペンキが散った魂を想像するとかわいい。彼女（彼）の現世での振る舞いをずっと眺めていたい。

銀紙で夜を包んでゆく作業
飛和

どこかに「夜の工場」のような場所があって、これから訪れる夜を個包装していると読んだ。夜の長さは夏至がもっとも短く、冬至がもっとも長く、毎日微妙に違っているから、繊細な手作業が適しているだろう。開くと夜が溢れ出す銀紙、というアイデアも魅力的だ。

しんしんきえい
呟けば遠くから聞こえるあれは
雪の絶叫
汐見りら

「しんしん」はしずかに雪が積もる様子をあらわす擬態語、「きえい」は叫び声のようでもあり、「消え入る」の言いさしのようでもある。人間の間では「新進気鋭」は良い意味で使われる言葉だが、雪にとっては滅びの呪文に等しいのだろうか。人間の呟きに断末魔を上げる雪、という発想のおもしろさ。

冬の日のエコー写真はぼんやりと

クリアファイルに挟まれた海

常田 瑛子

三好達治「郷愁」をはじめとして、海と母をむすびつける詩は多い。この歌の「エコー写真」は母の変奏だろう。クリアファイルは使えば使うほど表面に傷がついて不透明に近づいていくが、この歌のクリアファイルも透明ではなく白みがかった色を想像した。

水っぽいふたりの苗字で飼う魚

池田 彩乃

偶然おなじ苗字の人が二人いたという読みも可能だが、わたしは苗字が二つあると読んだ。

「苗字で魚を飼う」という発想がかわいい（たとえば「海野」と「川村」さんだったら、海水と淡水になってしまうから、魚は飼えない？）。また、「ふたりの苗字」を魚が行き交う距離感に、ともすれば二つの苗字を一つにしてしまう結婚という制度への批判を読むのは、読み過ぎだろうか。

お菓のまわり甘くて冬深む

有野 水都

ここでいう「お菓」とは糖衣錠のことだろう。わたしたちはふだんおおざっぱに糖衣の部分も菓だと思っているが、糖衣はあくまでも「お菓のまわり」なのだ、という把握が冴える。菓と糖衣を一緒くたにしてしまわないからこそ、甘みもはっきりと感じられる。